

◇講演申込み・発表に際しては、特に次の事項を厳守して下さい。

1. 講演内容は完成度の高い研究とする。
2. 講演は1人1回に限る。
3. スピーカーを発表者の筆頭に書くこと。
4. ビラは使用禁止、スライドまたはオーバーヘッドプロジェクターの使用に限る。

◇旅館については別掲のリストを参照の上、各自で直接申込んで下さい。

雑 報

IAU シンポジウム No. 106「銀河系」

1983年5月30日-6月3日の期間、上記のシンポジウムがネーデルランド北部の大学町 Groningen で開かれた(通称オランダは正式な国名ではなく、州名であり、Groningen は、Groningen 州にあるので、オランダの Groningen といっけいけいなのだそう)。このシンポジウムは Groningen のカプタイン研究所創立百周年を記念して企画され、IAU 第33委員会(銀河系の構造と力学)主催、第28(銀河)、第34(星間物質)、第41(天文学史)の各委員会共催という形で開かれた。

参加者約160名。研究発表も総合報告を主とした講演が約70、ポスターが約90と非常に多く盛会であった。これだけ大規模なシンポジウムではあったが、主催者の準備がゆきとどいていて、進行もスムーズであった。特にあらかじめ配られた予稿集と参加者リストは好評だった。日本からも名大の藤本(招待講演: 大小マゼラン雲の衝突)、宇宙科学研の奥田(銀河系内部領域の近赤外観測)、東京天文台の海部(銀河系中心の分子雲の構造と運動)・祖父江(銀河磁場の二本腕構造)・家(銀河ガス円盤の短波長振動)が参加し、それぞれの発表を行った。

集録がライデル社から出版される予定なので詳しい内容はそちらをみていただくことにして特徴的だったことをいくつか報告したい。まず、前述のようにカプタイン研究所百年記念ということで特に銀河研究の歴史に関するセッションが設けられ、天文学史家や A. Blaauw など年輩の天文学者によるカプタインの業績紹介をはじめとする興味深い講演があったのが異色といえるだろう。年輩といえば参加者中最古参の J. Oort (1900年生まれ)も銀河中心について最新のデータに基づいた明解な総合報告をされた。オールド・パワーの面目躍如たるシンポジウムであった。

多少フォーマルな話としては、IAU 第33委員会「銀

内地留学奨学金希望者募集

昭和58年度の内地留学奨学金を希望される方は9月20日までに所定の応募用紙に必要事項を記入のうえ、「〒181 東京都三鷹市大沢 2-21-1 東京天文台内 日本天文学会理事長」宛にお申し込み下さい。応募用紙は庶務理事に御請求下さい。なお奨学金として支給可能額は総会記事中の昭和58年度予算の内地留学奨学金特別会計を参照して下さい。

河定数」ワーキング・グループ班長の F. Kerr がワーキンググループとしては、当面は銀河定数の改訂値を出すことは控えることにした旨の報告をした。

アストロノミーとしては、このシンポジウムは1978年の IAU シンポジウム No. 84「銀河系の大局特性」や1982年の同 No. 100「銀河の内部運動と力学」につながるものである。テーマが広範で、総合報告を主とする形式をとったので、銀河系研究のいろんな側面でのこの間の発展に触れるには良い機会となった。観測面では、日本のグループや特に今年初めに打ち上げられた IRAS による銀河面サーベイ、COSB による高エネルギーガンマ線銀河面サーベイ、野辺山 45m 電波望遠鏡や VLA による銀河中心域のミニ渦状腕の観測、ベル研究所の M31 の CO 地図と IRAS による M31 の赤外地図などが注目を浴びた。観測の窓が着実に拡がり、研究者の波長間交流の重要性が認識された。銀河系の“渦状構造”をどう同定すべきかについては多くの議論があり、客観的なパターン解析法の必要性が指摘された。また銀河ハローの問題と星の生成と分子雲の問題についてもいろんな角度からの検討があった。

番外に、カプタイン記念館の見学、ジブシー (Groningen Image Processing System) の実演、フリジア湖と運河の遊覧船旅行、音楽会が催された。

家 正則 (ケンブリッジ大学)

☆ ☆

☆ ☆ ☆